

グループ・ダイナミックスの理論と実践

Théorie et pratique de la dynamique de groupe

杉万俊夫 SUGIMAN Toshio

Résumé

La dynamique de groupe se définit comme une science humaine portant sur le dynamisme des caractéristiques générales d'un agrégat, science totalement autre que la science naturelle, dont la théorie s'appuie sur le constructivisme social qui traite, non pas l'individu disposant d'un cœur dans le corps, mais la collectivité comme sujet de l'action. Cette idée ne reconnaît pas la prise de position des chercheurs qui visent à étudier l'objet de façon distincte en partant du sujet sur le plan épistémologique : elle ne postule que la méthodologie de la pratique en collectivité entre l'objet ou plutôt les objets que sont l'acteur du terrain et le chercheur. Le dynamisme du groupe crée ainsi un message de connaissance entre l'acteur et le chercheur, message possible à travers leur mise en pratique en collectivité.

Le terrain de recherche du dynamisme de groupe se développe en termes de mouvement d'échange entre un premier et un deuxième mode. Le premier consiste à saisir l'état des lieux du terrain pour y apporter une amélioration tout en supposant même une simulation au futur et s'opère nécessairement sur « un présupposé inconnu ». Le deuxième mode commence juste au moment de l'éveil à ce présupposé. Un message délivré d'un certain terrain peut arriver à un autre endroit, situé différemment sur le plan spatio-temporaire, à tel point qu'il se développe sur la pratique en collectivité en faisant le lien d'un lieu à un autre. La théorisation du chercheur apporte une contribution en faveur de l'approfondissement du premier mode, de la possibilité de développement du passage du premier au deuxième, ainsi que de celui de réseaux locaux.

Mots clefs

collectif, constructivisme social, sciences humaines, pratique en collectivité, pre-

1. グループ・ダイナミックスとは

1.1. 集合体の動学

グループ・ダイナミックスは、集合体の全体的性質 集合性 の動態を研究する人間科学である。人間科学とは、自然科学に対するもう一つの科学である。人間科学と自然科学の違い、人間科学の方法論については、次節で述べる。

グループ・ダイナミックスが対象とする集合体（グループ）は広範多岐にわたる。

- ・夫婦、恋人どうしといった二人グループ
- ・一緒に仕事をしている数人、あるいは、一緒にスポーツを楽しんでいる数人のグループ
- ・一つの企業に所属する何百、何千、何万という人のグループ（普通、組織と呼ばれるグループ）
- ・野球場の観客席を埋めつくす数万人のグループ（普通、観衆、群集と呼ばれるグループ）
- ・同じコミュニティに居住する何千、何万という人々のグループ
- ・日本列島の上に住む一億二千万の人々のグループ（国民と呼ばれるグループ）

等は、すべて、グループ・ダイナミックスが研究対象とする集合体の例である。地球環境問題や南北問題がクローズアップされる現在、宇宙船地球号の乗組員数十億という巨大な集合体を研究対象にすることも時代の要請である。

グループ・ダイナミックスが対象にする集合体は、上に例示したような、集合体の人々が空間的なまとまりをもって存在している集合体に限定されない。たとえ、空間的には散在していても、同じ言語、方言、専門用語などを使用する人々は、一つの集合体として取り扱う。また、地域的には拡散していても、ある流行を追う人々、ある特定の事物を使用する人々も、一つの集合体として取り扱う。

さらに、争い合う複数の人も一つの集合体として捉える。また、対立抗争の関係にある複数の集団は、個々の集団も一つの集合体ではあるが、同時に、複数の集団をひとまとめにして一つの集合体として捉えることもできる。

以上、集合体の人間に焦点をあててきたが、集合体の概念には、人間のみならず、人間にとっての環境も含まれる。すなわち、集合性とは、集合体の人々とその環境が一つの全体として有するトータルな性質である。

1. 2. 社会構成主義

しばしば、集合体は、直接、間接の影響関係にある個人の集合として定義される。しかし、この定義は、個人についての周到な考察を欠いている。グループ・ダイナミックスは、この定義を採用しない。

1. 2. 1. 「個人 = 心を内蔵した肉体」という常識

私たちは、普通、人間といえば個人を想像する。その場合の個人とは、まずもって、皮膚で囲まれた肉体である。しかし、その肉体が、イコール個人ではない。個人は、頭の中で考えたり、心の中で感じたりする肉体である。個人とは、その内部に、思考や感情（あるいは、情報処理）の座を有する肉体、すなわち、「個人 = 心を内蔵した肉体」というのが、私たちの常識である。あるいは、心の方を中心に据えて言えば、「肉体に内蔵された心」という観念が、私たちの常識である。

「個人 = 心を内蔵した肉体」という常識は、「外界と内界を区別する」常識と表裏一体である。「肉体に内蔵された心」は内なる世界、すなわち、内界である。一方、外なる世界、すなわち、外界は、内界にどのように捉えられる（認識される）かとは無関係に、それ本来の姿で存在する、と考えられている。外界には、皮膚の外側のみならず、皮膚の内側も含まれる。内臓は皮膚の内部にあっても外界である。内臓の状態を感じる（認識する）とは、皮膚の内部にある外界（内臓）を、肉体に内蔵された内界に捉えることである、と考えられている。

しかし、「個人 = 心を内蔵した肉体」、あるいは、「肉体に内蔵された心」という常識は、私たちの素朴な日常経験から自然に形成された常識ではない。この常識は、特定の歴史的経緯、および、生育史的経緯を経て、私たちの常識になったのである。本章では、この点について詳しく述べるゆとりはない。この常識が素朴な日常経験と矛盾さえしていることは、廣松（1982, 第二編第一章; 1993, 第二編第一章）において、きわめて論理的に述べられている。それをわかりやすく解説したものに、楽学舎（2000, 第二章）がある。また、COULTER（1979）は、「肉体に内蔵された心」が、日常の言語活動を通じて社会的に構成された観念であることを明解に論じている。さらに、「個人 = 心を内蔵した肉体」という常識が、どのような歴史的、生育史的経緯を経て形成されたのかという点については、大澤（1990）が社会学的身体論の立場から卓抜した考察を行なっている（そのわかりやすい解説については杉万（2006, 第一章）を参照）。

1. 2. 2. 現前・身体・事物

では、「個人 = 心を内蔵した肉体」という常識を前提にしないとして、いか

なる前提からスタートすればよいのだろうか．まず，その前提を述べる準備として，三つの用語「現前・身体・事物」を導入しよう．

まず，現前という用語．あなたの周りは決して無ではない．あなたには，何がしかの世界が立ち現われている．その，立ち現われていることを「現前する」と言う．世界といっても大仰に考える必要はない．あなたには，何がしかの風景的世界が現前しているはずだ．しかも，その風景的世界は，決して一枚岩ではなく，さまざまな分節肢に分節している．たとえば，本，ボールペン，机，などの分節肢が現前している．

現前という概念は，認識（みえる，聞こえる，等）よりも浅い概念である．なぜならば，認識という概念は，単に現前するという意味をこえて，例の「外界と内界を区別する」常識に基づく暗黙の了解をも包含している．たとえば，花がみえる（花を認識する）と言うときには，外界に花が実在しており，その花を内界に捉えたということが暗黙の了解となっている．それに対して，現前という概念は，そこまで立ち入らない．ただ，無ではない風景的世界が現前していること，その風景的世界の中に花という分節肢が現前していること，そこまでを意味しているだけである．

現前する風景的世界は身体と事物から成る．身体とは，それに対して風景的世界が現前しているもののことである．言うまでもなく，身体は心を内蔵していない．一方，事物とは，それに対して風景的世界が現前していないもののことである．あなたにも，そして，あなたの隣に座っている友人にも何がしかの風景的世界が現前しているがゆえに，あなたも友人も身体である．また，部屋の片隅にいる猫にも，おそらく何らかの風景的世界が現前しているであろうから，その猫もまた身体である．それに対して，机やその上のコップには風景的世界が現前していないがゆえに，それらは事物である．

身体と事物の区別は，生物と非生物の区別と同じではない．何が身体であり，何が事物であるかは，それらの身体と事物を含む集合体の状態によって規定される．たとえば，小さい子どもと，その子がまるで妹のようにかわいがっているぬいぐるみ（もし，そのぬいぐるみが傷つけられた日には，自分の体を傷つけられたような痛みを感じるようなぬいぐるみ）の集合体では，子どもはもちろん，ぬいぐるみも身体である．後述する「互換する身体」の箇所（**頁）で導入する概念を用いるならば，互換が生じるか否かが，身体と事物を区別する基準となる．

1. 2. 3. 集合体こそ主体

身体に現前する分節肢は，すべて，何らかの意味をもっている．つまり，現

前するのは単なる「何か」ではない。たとえば、「机」という意味をもつ「何か」である。言い換えれば、「机としての何か」である。仮に、いますぐどこかに飛んでいってもいい綿ごみであろうとも、それは、「いますぐどこかに飛んでいってもいい綿ごみ」という意味をもつ「何か」である。「いますぐどこかに飛んでいってもいい綿ごみとしての何か」である。

さらに言えば、意味をもたないものは、そもそも現前しない。そもそも分節肢になりえない。今、図一のように二つ並んだ本棚があり、それを熟視したとしよう。はたして、黒でぬった多角形は現前していただろうか。お



図 1.

そらく、本棚一個分、二個分、あるいは、本棚の一段分、二段分は現前していただろう。しかし、黒でぬったような奇妙な多角形は現前していなかったであろう。その理由は、奇妙な多角形には意味がないからである。一方、本棚の一個分や一段分には意味がある。実際、多くの人々が、過去に、本棚一個を購入した経験や、一段分の本がダンボール箱に納まるかどうかを思索した経験をもっている。したがって、本棚一個や棚一段は、そのような経験に裏づけられた、何らかの意味をもっている。

意味は、集合体の中で形成される。「机」という意味は、机を机として使用する身体（たち）と、机と称される（多くの）事物を含む集合体の中で、不断に維持されている。あるいは、「もう随分古くなったから、そろそろ買いかえたい机」という意味は、そのように語り合う家族とその机から成る集合体によって形成され、その集合体の中で維持される。

以上、分節肢の現前にとって、意味が不可欠であること、意味は集合体の中で形成されることを述べた。これら二点から、身体に世界が現前するのは集合体のなせるわざである、という結論が導かれる。あえて、身体に世界を現前させる主体を問うならば、それは、その身体を包含する集合体である。決して、「肉体に内蔵された心」ではない。

集合体が世界を現前させる（集合体が、身体に現前する世界を構成する）という前提は社会構成主義（例えば、GERGEN, 1994a, 1994b, 2000）と呼ばれている。社会構成主義はグループ・ダイナミックスの前提（メタ理論）でもある。

2. 人間科学としてのグループ・ダイナミックス

2. 1. 人間科学

グループ・ダイナミックスは、自然科学に対するもう一つの科学、すなわち、人間科学の立場をとる。では、人間科学としてのグループ・ダイナミックスは、いかなる方法論に依拠するのか。まず、改めて自然科学の基本を整理し、それとの対比をしながら人間科学の特徴を述べることにしよう。

2. 1. 1. 自然科学の基本

自然科学が対象とする事実は、次に述べる二つの特徴を持っている。それらは、自然科学を研究する者にとって、あるいは、自然科学を学ぶ者にとって、あまりにも自明の特徴である。

第一に、自然科学が対象とする事実は、自然科学が発見する前から存在していた事実である。ただ、発見される前は、だれも、その事実を知らなかっただけのことである。だれも知らなかったけれども、じつは、存在していた事実を発見すること、これが、自然科学の発見である。例えば、DNAの二重らせん構造は、1950年、ワトソンとクリックという二人の生理学者によって発見された。しかし、DNAは、ずっと昔から、二重らせん構造をしていたのだ。ただ、人間が、それを知らなかっただけの話である。その、誰も知らなかった、しかし、存在していた事実が、ワトソンとクリックによって発見されたわけである。

第二に、自然科学が対象とする事実は、その事実が発見され、広く知られるようになったからといって、その事実自体が変化してしまうことなどありえない。つまり、事実が発見されたがために、事実が事実でなくなるといったことはありえない。DNAの二重らせん構造が発見され、教科書に書かれるようになったからといって、急に、DNAが三重らせん構造や四重らせん構造に変化してしまうなど、もはや、悪い冗談である。

このように、自然科学は、人が知ろうと知るまいと存在している事実を対象にする。言いかえれば、人が知る知らないとは無関係に存在している、自然のあるがままの姿、本来の姿こそ、自然科学にとっての事実である。

自然のあるがままの姿、本来の姿を発見しようとするならば、その、あるがままの姿を壊さないように注意しながら観察する必要がある。もちろん、観察対象に、ある程度の操作を加えることもある。観察対象に測定機器を装着したうえで観察する、観察対象に実験的操作を施したうえで観察する、など。しかし、いかに操作を加える場合でも、その操作は必要最小限の操作に限られる。測定機器の装着によって、本来の姿が変化してしまうような事態、必要以上の実験的操作によって、本来の（変化の）姿が歪曲されてしまうような事態は、

慎重に回避されねばならない。ましてや、観察者の願望によって観察結果が左右されることなど、あってはならないことである。

こうして、自然科学では、観察対象と観察者の間には、明確に一線が引かれることになる。そして、観察対象を一線の向こう側に据え、観察者は、一線のこちら側から、自らの主観を交えることなく観察しなければならない。これが、自然科学の基本である。

2. 1. 2. もう一つの科学 人間科学

自然科学が、われわれの知的世界を豊かにしたことは、改めて言うまでもない。自然科学は、われわれが知らなかった、しかし、存在していた事実を、次々に発見してきたし、今後も発見し続けるだろう。

しかし、先に述べた自然科学の基本が通用しない現象もある。つまり、観察者と観察対象の間に一線を引いて、両者を分離することが不可能な現象である。そのような現象では、観察者が好むと好まざるとにかかわらず、観察者と観察対象の間に相互作用が生じてしまう。言いかえれば、観察者と観察対象による共同実践が進行してしまうのである。

このような現象では、観察者が手にする事実も、共同実践を成立基盤とする。事實は、共同実践の中で生まれ、生まれた事實は、共同実践の対象となる。言いかえれば、事實は、共同実践の当事者（研究者と研究対象）にとっての事実である。その意味で、事實は、当事者たちが、その事実を知っているからこそ、事実となる。この点において、当事者が知ろうが知るまいが存在する自然科学の事実とは、決定的に異なっている。

観察者と観察対象の間に一線など引けない現象、したがって、両者の間に共同実践が進行してしまう現象は少なくない。例えば、経済予測について考えてみよう。観察者（経済学者）は、観察対象（国民の経済活動）を観察し、その実態を把握し、経済動向を予測する。ここで、仮に、ある経済学者が、今後、景気は悪くなると予測したとしよう。また、その予測が、マスコミで広く報じられたとしよう。

一つの可能性として、企業は、景気の悪化による消費の冷え込みをみこして、早々、生産を抑制、一方、消費者の方も、所得が増えない、あるいは、減少することをみこして、財布のひもをひきしめるかもしれない。そうすれば、実際に、景気は悪くなる。予想が当たったわけである。しかし、予想的中は、観察者の実態把握や、予想の根拠が正しかったことを意味しない。観察者（経済学者）の予測を観察対象（国民の経済活動）が知る（織り込み済みとする）ことによって、観察対象が、予測の方向に変化し、その結果、予測が的中してし

まったにすぎない。このような現象を、社会学者マートンは、「予言の自己成就」と呼んでいる。

逆の可能性もある。企業は、景気の悪化による消費の冷え込みを恐れ、生産コストの削減、製品価格の切り下げに努めるかもしれない。もし、多くの企業が製品価格を切り下げ、物価が安くなれば、消費者は購買意欲をそそられ、景気は悪くならないかもしれない。今度は、予測がはずれたわけである。しかし、再び、予測がはずれたのは、観察者の現状把握や、予測の根拠がまちがっていたからとは言えない。先の予測が的中してしまった場合と同じく、観察者（経済学者）の予測を観察対象（国民の経済活動）が知る（織り込み済みとする）ことによって、観察対象の方が変化し、その結果、予測がはずれてしまっただけの話である。

重要なことは、観察者が発見した事実を観察対象が知ると、観察対象が変化してしまうということである。いかに観察者と観察対象の間に一線を引き、両者を分離しようとしても、それは不可能なのだ。このようなことは、自然科学では、全く想定されていない。

経済予測の例における観察者と観察対象の間には、単に、両者の間に一線を引けないという以上の関係がある。そもそも、観察対象が、予測を聞いて、生産・消費行動を変えるということは、観察対象が予測を求めているからである。経済活動には、予測が必要である。何をどれだけ生産するかを決定するには、市場の動きを予測しなければならない。値のはる商品を、今、買うべきか、もう少し待つべきかを決めようとするれば、これまた、今後の市場動向を予測しなければならない。そして、このような経済予測に対する生産者と消費者のニーズに応えて、経済学者は、今後の経済動向を予測する。

つまり、経済学者（観察者）は、生産者・消費者（観察対象）とともに、経済活動という共同実践に参加しているのだ。経済学者の予測は、その共同実践の中で発せられた一言である。日頃の会議（という共同実践）の中で、ある発言が全員の意見を変えることがあるように、経済活動という共同実践の中で、経済学者の予測が経済活動を変えても、何ら不思議はない。むしろ、観察者の予測による観察対象の変化は、観察者と観察対象が共同実践を行っていることの証拠でさえある。

以上、経済予測を例に引きながら、研究者と研究対象の間に一線を引けない現象。したがって、両者による共同実践が進行してしまう現象の存在を指摘した。いわゆる人文・社会科学が取り組んできた現象の多くは、この種の現象である。しかし、従来、この種の現象に対しても、自然科学のスタンス 研

研究者と研究対象の間に一線を引くスタンス で取り組まれることが多かった。その根底には、科学を自然科学と等置する前提があった。

そもそも、科学という営みは、徹底的な言説化へのこだわりにおいて、他の営みから区別される。決して、行間に語らせるのではなく、日常言語、数学その他の記号言語を用いて、徹頭徹尾、言説化していくこと。ここにこそ、科学という営みの特徴がある。そうであれば、一線の向こうの対象を、一線のこちら側から徹底的に言説化していくのは、科学の一つの流儀ではあっても、決して、そのみが科学ではない。

研究者と研究対象との間に一線など引けないこと、研究対象との共同実践が進行してしまうことを織り込み済みにしたうえで行われる言説化もありうるはずである。いや、さらに前向きに、研究対象（当事者）との共同実践を意図したうえで行われる言説化も、あってしかるべきである。そのように、研究対象との共同実践を前提、ないし、目的にする言説化の営みを、人間科学と呼ぶことにしよう。

もはや、科学 = 自然科学ではない。もう一つの科学、すなわち、人間科学もある。科学 = 自然科学 + 人間科学である。では、人間科学の現場はいかにあるべきか。

2. 2. 当事者と研究者による共同実践

2. 2. 1. ローカルな共同実践

人間科学では、事実は、共同実践の中から生まれ、共同実践の中に編み込まれていく。人間科学は共同実践のための科学である。研究者とフィールドの人々は、共同実践を行う。したがって、フィールドの人々は単なる研究（観察）対象ではなく、当事者と呼ぶべきだろう。

研究者と当事者の共同実践は、必ずしも平坦な道のりではないであろう。双方の主張が食い違い、激しく対立することがあるかもしれない。しかし、対立を経験しながらも、共同実践が一段落し、当事者と研究者が、実践の記録とそこでの思考を、共同のメッセージとして発信できることもある。この当事者と研究者による共同メッセージこそ、人間科学の知識である。

共同実践は、特定の時期（時代）に、特定の場所で、特定の人々によって行われる。もちろん、時期の長い短い、場所の広い狭い、人々の多い少ないは、さまざまである。しかし、そのような違いはあっても、共同実践は、限定された時期に、限定された場所で、限定された人々によって行われる。人間科学の知識は、基本的に、限定された時期と場所における限定された人々による共

同的实践，つまり，ローカル（局所的）な共同实践の中から生まれる。

一方，自然科学は，すでに存在していたけれども，人間が知らなかった事実を発見する．その事実は，場所をこえて，時代をこえて妥当するユニバーサル（普遍的）な事実である．つまり，自然科学は，普遍的事実を探求する科学である．普遍的事実を探求するには，事実についての知識が普遍的に正しいことを，実験や観察によって実証しなければならない．したがって，自然科学の目的は，普遍的事実の「実証」だといえる．それに対して，人間科学の目的は「実践」，共同的な実践である．

人間科学の目的が実践であるからといって，データ収集や観察が人間科学に不要だなどというわけではない．データ収集や観察は，人間科学にとっても非常に重要である．しかし，人間科学におけるデータ収集や観察は，あくまでも共同实践のためのものである．それに対して，自然科学におけるデータ収集や観察は，普遍的事実を実証するためのものである．自然科学のデータや観察結果は，場所をこえ，時代をこえて妥当する事実（現象）の「標本（サンプル）」である．

人間科学のデータ収集や観察は，ローカルな共同实践の中で，その共同实践のために行われる．共同实践を行なおうとすれば，現状をよく観察しなければならないのはもちろんである．必要ならばデータも集めなければならない．現状のみならず，過去のいきさつや歴史について，よく調べてみる必要性も出てくる．あるいは，将来について，予想やシミュレーションをしてみることが必要になる場合もある．このように，人間科学にとっても，データ収集や観察は重要である．しかし，人間科学のデータ収集や観察は，あくまでも，ローカル（局所的）な現状，過去，将来を把握するためのものである．決して，場所をこえて，時代をこえて妥当する普遍的事実を発見するためのものではない．

自然科学は，現在を理解するに当たって，過去遡及的に「原因」を解明し，その原因の結果として現在を理解する．しかる後に，諸前提の大枠に変化がなければ，過去から現在に至る原因 - 結果関係を未来に外挿する．この意味で，自然科学は，第一義的には，過去遡及的（バックワード）な性格をもつ．

これに対して，人間科学は，現在を，未来志向的に，「目的因」への通路として位置づける．そして，あくまでも目的因に向かっての運動のために，現状の詳細，および，過去から現在に至った道のりが，社会的に構成される．この意味で，人間科学は，第一義的には，未来志向的（フォワード），ないし，価値志向的な性格をもつ．われわれが，工学に未来開拓的な性格を感じるのは，工学には，すでにして，人間科学的要素が含まれているからである．工学は，

人工物についての自然科学という側面と、人間科学としての側面をあわせ持っている。

2. 2. 2. 一次モードと二次モード

ローカルな現状，過去，将来を把握し，その把握に基づいて問題解決に取り組む段階を，共同実践の一次モードと呼ぶことにしよう．この一次モードでは，データ収集や観察も必要になる．また，研究者は，さまざまな概念や理論を持ちこむ．

重要なことは，一次モードの共同実践は，必ず，ある前提，しかも，気づかざる前提の上に立った実践である，ということである．「気づかざる」というところが重要である．自分たちが前提にしていることを，徹底的に洗い出し考えぬいたとしても，考えついた前提のそのまた根底に，必ず，「気づかざる前提」が存在している．言い方を変えれば，気づかざる前提に立たない共同実践など，そもそも不可能である．気づかざる前提に立って初めて，共同実践を行なうことが可能になる．

ところが，共同実践が進行するうちに，それまでの実践の根底にあった「気づかざる前提」に気づくことがある．この「気づかざる前提」に気づく段階を，二次モードと呼ぼう．「あっ，そうか．いままで，そういう前提に立っていたのか」と，それまでの（一次モードの）前提に，過去形で気づくモードである．こうして，二次モードを経て，新たなる一次モードに入っていく．

新たなる一次モードでは，現状，過去，将来の把握の仕方が，前の一次モードとは異なってくる．また，前の一次モードで行なった共同実践の意味合いも異なってくる．しかし，今回の一次モードの共同実践もまた，気づかざる前提 ももちろん，前回の気づかざる前提とは違うけれども に立っている．その気づかざる前提に気づくときには，新たなる二次モードに入っていく．

人間科学の現場は，一次モードと二次モードの繰り返し，一次モードと二次モードの連続的交替運動である．この二つのモードの交替運動は，小さな（微視的な）交替運動と大きな（巨視的な）交替運動に分けることができる．まず，微視的な交替運動が，日常的に進行している．小さな気づき，小さな発見は，すべて，一次モード 二次モード （新たなる）一次モードという交替運動である．もちろん，この場合には，気づかざる前提に気づいたという感覚は伴わないし，気づかざる前提が大きく変化するわけでもない．しかし，いかに小さい変化ではあるにしても，気づかざる前提は，必ず，変化している．感覚的には，とくに前提が変化したという感覚はなくとも，現状，過去，将来の事実を徹底的に調べ，実践の対象としていくことによって，じつは，気づかざる前提

の方も、徐々に変化している。この微視的な交替運動が数多くなされるところに、大きな（巨視的な）交替運動に向けてのエネルギーが蓄積されていく。

大きな（巨視的な）交替運動の場合には、二次モードに入ったとき、まさに、気づかざる前提に気づいた、という感覚を伴う。「そうか、自分たちは、そう思い込んでいたのだな（そういう、気づかざる前提に立っていたのだな）」と、目の上の鱗が落ちたような感覚を覚えることもあるだろう。このような大きな交替運動が生じると、それまでの（一次モードの）実践や、その基礎になっていた現状、過去、将来の把握が大きく変化する。

以上、一次モードと二次モードについて述べたことは、人間科学のみならず、自然科学にも当てはまるように見える。確かに、自然科学においても、日ごろの小さな発見、あるいは、新奇な発見をきっかけに、おもとにある基礎理論（前提）が改訂されてきた。そして、基礎理論が改訂されると、従来の多くの知見が、改訂された基礎理論の上に再編成される。このプロセスは、人間科学について述べた、一次モード 二次モード（基礎理論の改訂） 新たなる一次モードと同じように見える。

しかし、自然科学では、このような基礎理論の改訂を続けることによって、普遍的な事実に接近できるという大前提がある。逆に言うと、普遍的な事実に接近していくためにこそ、基礎理論の改訂がなされるのである。一方、すでに述べたように、人間科学は、普遍的な事実を追求する科学ではない。人間科学は、ローカルな共同の実践のための科学である。一次モードの共同の実践が、二次モードを経て、新たなる一次モードの共同の実践に入ることによって、当事者や研究者は、自らの実践や、そのための現状・過去・将来の把握に対して確信を深めていこう。しかし、そのことは、普遍的に妥当する事実（時代や社会をこえて、万人に妥当する事実）を手にするを意味しない。

2. 2. 3. 目的と価値観

実践には、必ず目的がある。また、実践は、必ず何らかの価値観を前提にしている。そうであれば、実践の中から生まれる人間科学の知識にも、何らかの目的・価値観が前提になっているはずである。さらに言えば、人間科学の知識は、その知識の前提となっている目的や価値を共有する人々の実践にとってこそ、意味ある知識である。

一方、自然科学では、特定の目的や価値観によって知識が影響されるなど、もつてのほかである。医学書に書いてある知識は、いかなる目的や価値観を持っている人にも当てはまる。自然科学は、目的や価値観などとは無関係に存在している事実を取り扱う。

それに対して、人間科学は、目的や価値観と分かちがたく、結びついている。したがって、ある人間科学の知識を使うということは、その知識の発信者と目的や価値を共有していくことを意味する。それだけに、人間科学の知識を作り出す研究者も、人間科学の知識を使おうとする人々も、自らの目的や価値観を問い続けることが必要である。

先に述べた一次モードと二次モードの交替運動は、目的や価値観についても当てはまる。目的や価値観は、常に自覚されているとは限らない。しかし、私たちの実践は、必ず、何らかの目的や価値と結びついている。その証拠に、自らの目的や価値観とかけ離れた人に出会うと、ショックを受けたり、場合によっては感銘を受けたりする。

当事者も、研究者も、自覚することなく、特定の目的や価値観に縛られていることが多い。そのような場合、当事者や研究者に、自分を縛っている目的や価値観を気づかせることも人間科学の役割である。「あっ、そうか、自分(たち)は、そういう目的・価値観に縛られていたのか」、「そうだとしたら、もし、目的や価値観を変えれば、明日に向かって、こういう一手もあるじゃないか」という具合に。

2.2.4. ローカルからインターローカルへ

共同の実践は、特定の人物(当事者と研究者)によって、特定の場所、特定の時代(時期)に行われる。このような限られた範囲の人物が、特定の場所で、特定の時代に行なう共同の実践を、ローカル(局所的)な実践と呼んだ。このローカルな共同の実践についての共同的メッセージから、人間科学の知識が生れるわけである。

ローカルな共同の実践についての共同メッセージは、特定の人物、特定の場所、特定の時代に彩られた生々しい実践の記録である。生々しい記録は、それなりに人の心をうつものであるが、同時に、他の場所、他の時代の他の人々の実践に結びつきにくいのも事実である。他の人が、参考にしようと思っても、「あの人物だったから、あの場所だったから、あの時代だったから、できたのだ」と思わざるをえない。

そこで、生々しい記録を、ちょっとだけ抽象化してやる必要がある。つまり、ちょっとだけ一般的な概念を使って、直接の当事者ではない人にも理解できるようにするのである。この抽象化の作業も、研究者と当事者が共同して行なう。おそらく、研究者の方が、「こういう概念が使えるのではないか」と提案する場合が多いだろう。研究者は、その概念について、かみくだいてかみくだいて、わかりやすく説明しなければならぬ。また、当事者の方も、決して研究者の

言いなりになってはいけない。自分（たち）の実践が、その概念で的確に表現されるのか、また、その概念で自分（たち）の実践をメッセージにしてよいのか、徹底的に考え、研究者とも議論しなければならない。こうして、当事者と研究者の共同による、人間科学の知識が生まれ、発信される。

こうして、あるローカルな場所・時代から発信された知識は、抽象化のおかげで、他のローカルな場所・時代に伝播していく。あるローカルな場所・時代から発信された知識は、他のローカルな場所・時代にいる人（たち）によってキャッチされ、実践の参考にされるかもしれない。そうなれば、地点や時点を異にする二つのローカルな場が結びつくことになる。言いかえれば、二つのローカルな場の間にも、共同の関係、共同の実践が生まれるわけである。つまり、ローカルな知識が、インター・ローカルな知識になる。こうして、共同実践の輪が広がっていく。

もちろん、キャッチした知識をそのまま使うとは限らない。批判も結構である。ちょうど、一つのローカルな共同実践の中に、当事者と研究者の対立がありうるのと同じように、異なる地点・時点の間の共同実践にも批判や対立はありうるはずである。むしろ、そのような批判や対立を通じて、批判する側、される側の共同が深まり、ローカルなメッセージ（知識）が、より広範な人々のメッセージ（知識）へと鍛えられていく。

2. 2. 5. 研究者の役割 理論

研究者と当事者の共同実践において、研究者が研究者としてなすべき貢献は、理論に基づく貢献であろう。理論に基づく貢献を除外すれば、研究者としての貢献と研究者以外の人の貢献に、本質的な違いはない。

ここに言う理論の範囲は広い。個別の現象、個別の実践についての理論もあるだろうし、グランド・セオリー、メタ理論の類もあるだろう。また、データ解析、モデル構成など、研究手法についての理論もあるだろう。また、いかに人間科学的なフィールドワークであっても、自然科学の理論や概念も必要になる。

すでに述べたように、ローカルな共同実践は、一次モードと二次モードの連続的交替運動として進行する。理論は、この交替運動に寄与するものでなければならない。まず、一次モードにおいては、理論には、現状と過去の把握、将来の予測に役立つこと、および、実践の指針や計画を立てることに寄与することが求められる。次に一次モードにおける「気づかざる前提」を常に問い続け、二次モードへの進展を促進することも求められる。さらには、明示化された「気づかざる前提」に基づいて、先行する一次モードの認識や実践を再定位し、新たな一次モードへの進展に寄与することが求められる。

理論は、ローカルな共同実践の記録や、そこから紡ぎ出された言説を、抽象化、一般化することにも寄与しうる。理論によって抽象化、一般化された記録や言説は、他のローカルな共同実践への伝播力を獲得する。こうして、ローカルな共同実践が、インターローカルな共同実践へと拡大する可能性が開かれる。

最後に、人間科学の目的が、当事者と研究者の共同実践だからと言って、すべての研究者が、当事者と直接的な共同の関係になければならないなどと言っているのではない。むしろ、当事者との距離については、遠近さまざまな研究者が必要である。書斎の理論家もいれば、広い歴史的・空間的視野から理論を展開する研究者もいる。ただ、自然科学の理論家が、どこか末端で、試験管を振って実証する同僚を念頭に置いているのとは対照的に、人間科学における書斎の理論家や広い歴史的・空間的視野に立つ研究者は、どこか末端で、現実の当事者と共同する同僚を念頭に置いておく必要があるだろう。

参考文献

- COULTER, J. (1979), *The social construction of mind: Studies in ethnomethodology and linguistic philosophy*. London: Macmillan. (西阪 仰 訳 [1998], 『心の社会的構成：ヴィトゲンシュタイン派エスノメソドロロジーの視点』, 新曜社.)
- GERGEN, K. (1994a), *Toward transformation in social knowledge*, 2nd ed. London: Sage. (杉万俊夫・矢守克也・渥美公秀 監訳 [2006], 『もう一つの社会心理学；社会行動学の転換に向けて』, ナカニシヤ出版.)
- GERGEN, K. (1994b), *Realities and relationships; Soundings in social construction*, Cambridge: Harvard University Press. (永田素彦・深尾 誠 訳 [2004] 『社会構成主義の理論と実践：関係性が現実をつくる』, ナカニシヤ出版.)
- GERGEN, K. (2000), *An invitation to social construction*, London: Sage. (東村知子 訳 [2004] 『あなたへの社会構成主義』, ナカニシヤ出版.)
- 廣松 渉 (1982, 1993), 『存在と意味』第一・二巻, 岩波書店.
- 大澤真幸 (1990), 『身体の比較社会学』, 勁草書房.
- 楽学舎 (2000), 『看護のための人間科学を求めて』, ナカニシヤ出版.
- 杉万俊夫 (2006), 『コミュニティのグループ・ダイナミックス』, 京都大学学術出版会.

(京都大学)